■琉球新報　教育面リレーコラム『未来へいっぽにほ』
2017 年 4 月～9 月まで　NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークの神前が連載を担当しました。

2017 年 4 月 28 日

ダンスがセカイの扉を開く

未来へいっぽにほ

神前　沙織（NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）

私がコンテンポラリーダンスを知ったのは二十歳になったころだった。子どものころに見せてもらった、いろいろなジャンルのダンスや、テレビで見ていたダンスと違って、全然知らない世界が広がっていた。しかもそのダンスに人生を懸けて踊る人、サポートする人、批評する人などに出会い、世界基準のマーケットも存在していることを知り、それはもう衝撃だった。それからは、とにかくその世界を知りたくて劇場に通うようになり、いつの間にか「ダンスと社会をつなぐ」仕事に就いていた。

何がそんなに魅力なんだろう。言葉にしてみると「謎」なところかもしれない。それまでの私が知る限り、芸術作品には決められた答えや見方があるものだったのに、誰も答えらしきものへの導きをしてくれない。未熟な知識などを総動員して表現されたものを自分なりに解釈し、考えるしかない。

劇場に行くと、どこか異世界に瞬間移動して、何か見つけたりひらめいたり、共感できると私の心は無事に日常へ生還できるけれど、そうではないことも多々ある。それでもまた劇場に行くのは、見つけた時の喜びが何とも「幸せ」だからだ。作家と一緒に新世界を発見するような興奮……とでも言おうか。

もう一つ、人そのものが表現の素材となるダンスは、その人の生命のエネルギーがそのままダイレクトに伝わる魅力がある。プロのダンサーだとそれに神業のような身体能力や技術が加わり、魅せられてしまう。

現職場で最初に担当したコンテンポラリーダンスの全国巡回プロジェクトのチラシには、そうした自分自身のダンスとの出合いを表現したくて「ダンスがセカイの扉を開く」というキャッチコピーをつけた。12年たった今、その扉の向こうには劇場だけではなく教育や福祉など多様な現場が広がっている。

2017 年 5 月 26 日

自分のものさしを持つ

未来へいっぽにほ

神前　沙織（NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）

「ダンスと社会をつなぐ」仕事を始めて12年。ダンスという答えのないそもそもない芸術表現を目の前にして、それまでの自分の価値観や美意識が、実は誰かから教えてもらったものに基づいていると気づかされた大きなショックが、今の活動の原動力になっている。

「好きも嫌いも、良し悪しも、美しいかそうではないかも、自分で決めていい」という単純明快なことに、初めの頃は慣れなくて、気がついたらどこかに「正解」が落ちていないか探していた。どうして正解を求めてしまうんだろうと考え、行きついた答えは「自分の感覚に自信がない」だった。ではなぜ自信が持てないのか…。感覚が鈍っているからではないか！　と。

自分の感覚というものはとても曖昧で流されやすい。子どもの頃にはもっと無邪気に感覚を開いて自慢していたようにも思う。それが大人への成長の過程で、実体験ではなくインプットした記憶から正解を当てることの方が多く求められ、いつしか感覚など必要なくなって、分からないことが怖くなってしまっていた。

自分の感覚を開いて、いろんな情報をキャッチし、その中から自分なりの大事なもの、価値を見つける。自分のものさしを持つ。これは、私がダンスから教わったことだ。いま、学校や福祉施設などの現場で行っているダンスのワークショップで、最も大切にしていることでもある。分からない、経験がないと遠慮せずに、まず自分の感覚を信じて踊ってみてほしい。一度そうしてみると、実は内に秘めていたものや、これまで人目を気にしてできなかったことが、どんどん表に現れてくるものだ。それこそが、表現の本質ではないかと思う。

怖がらずに自分のものさしを持ってみよう。きっと人生の宝物になると思う。

2017 年 6 月 23 日

身体はうそをつけない

未来へいっぽにほ

神前　沙織（NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）

2011年度から文部科学省が子どもの表現力・創造力・コミュニケーション力を豊かにするための芸術体験事業を行っている。現代社会で子どもが生きる力をつける学習の一環として、美術、音楽、ダンスなどの専門家（アーティスト）が授業の中で、芸術表現のワークショップを行う。私は学校とアーティストのつなぎ役、それも創作ダンスを専門とするコーディネーターである。沖縄では2年前から沖縄市、那覇市、名護市、石垣市の計5校で実施した。

昨年度、那覇市の小学校で行った3日間の授業が記憶に新しい。思春期前の6年生60余名。自我の芽生えが「恥ずかしい」気持ちになって現れる微妙な年齢だ。1日目は心と体をほぐすのに時間をかけ、2日目は大きく動くとか、仲間の目を意識しすぎずに表現することに慣れてきて、3日目で一人一人の本来の表現が見えるようになる。個人差はあるが、少しずつ、いつの間にか普段の自分や周囲とのしがらみ、関係性を意識せずに自分を表現できるようになる。ともすると閉じられていた何かが開かれる。そういう発見が随所に見られた。

この時の担任は、そうしたダンスの可能性を見抜いてこう話した。「身体はうそをつけない。ノートも机も、隠すものが何もないから、体一つで勝負しないといけない。他の教科と違ってすぐ数値化できるものじゃないけれど、それ以上の人間力が身に付くと思う」

SNSが普及し、子どもたちが小さな機械に振り回されダイナミックさを失いつつあるという。そういう時代だからこそ、人それぞれの原石が磨かれる機会はたくさんあってほしい。

ちなみに今年度も当事業を行うことになった。現在、沖縄県教育委員会を通して参加校を公募している。

2017 年 7 月 21 日

未来へぽぽいっぽに

夏のコザの思い出

神前 沙織（NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）

7月になると思い出すのは、2012年から沖縄市で2年続けて行ったコミュニティダンスの公演だ。コミュニティダンスは「誰でもダンスを創り、踊ることができる」という考えで、アーティストがナビゲート役となり、踊ったことのない人も含めて、時には世代を超えてひとつの場を共有し、目的に向かって創造的な時間を一緒に過ごす。

沖縄市では、キジムナーフェスタ（現りっかりっか＊フェスタ）という国際児童・青少年演劇フェスティバルのプログラムの一つとして、約2週間のワークショップを経てダンスの作品を上演した。

会場はコザの中心にある一番街商店街。参加者は0歳の赤ちゃんから94歳のおばあまで、2年とも約70名。地元有志の音楽隊や美術チームが加わって、それは盛大な作品となった。さらには中の町青年会のエイサー、創作獅子舞に特別出演していただいた。

お客さんでいっぱいの商店街。心地よい音楽と力強いエイサーの太鼓、赤ちゃん、ママ、子どもやおばあたちのフレッシュなダンスと飛び切りの笑顔。カラフルな衣装に手作りの小道具など、今でも新鮮に思い出される。一人一人が表現に目覚める瞬間が、何よりいとおしく美しく見えた。関わる機会のなかった人同士が知り合い、人が人を呼び、地域とつながり、創り上げた舞台だった。

この時6年生だったコザっ子チームのメンバーの一人とは今も交流が続いている。「コミュニティダンスに参加して社交的になった」と語ってくれた。そんな彼女ももう高校生である。

この夏もまた、フェスティバルが始まる。コザでも連動して有志が企画し、久しぶりにコミュニティダンスが上演される。おばあたちがそれぞれの思い出を紡ぐように踊るダンス。そこからどんな世界が見えるのだろうか。

2017 年 8 月 18 日

未来へぽぽいっぽに

全ての人にダンスを

神前 沙織（NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）

私は小さいころから踊りを見るのが大好きで、いろいろな公演を見に行くし旅先で劇場に行くのも楽しみの一つだ。だが、コミュニティダンスを担当するようになって以降、踊りを見に行く場所が劇場の外にも広がり、踊り手がダンス経験の有無にかかわらず全ての人たちになった。見せていただいた踊りに感動を覚えることが、必ずしもダンサー、振り付け家の公演とは限らないシチュエーションがずいぶん増えた。

3・11の東日本大震災以降は三陸沿岸の文化による復興支援として始まった三陸国際芸術祭に携わるようになり、東北各地の郷土芸能に出会って、その奥深さに心底魅せられている。彼らもまた本職は漁業、農業、建築業、公務員、会社員など、さまざまだ。

劇場で見るダンス公演も学校や福祉施設などで見る踊りも民家の庭先で見た郷土芸能も、同じだけのパッションがあり、優劣をつけられない。どの「ダンサー」も、打ち上げや交流の席で踊りの魅力や楽しさを語ってくれる。いつまでも踊りをネタに飲み続けられる。そういう場から新たな交流や企画が生まれていく。

職業や経験にかかわらず、踊ることで、その人の中に宿る表現の原石が現れるきっかけになる。共通するのは、頭で考えるより全身で何かを伝えたり生み出そうとしたりすることかもしれない。震災後の祭りで見た踊りや舞には、自らの地域に対する誇りと気合が入り交じっていた。

踊ることで普段は見せない表情や動きに周囲が驚いたり、高齢者の場合はいつもは動かないところが動いた等の報告も数多くある。これは魔法ではなく、表現というものが持つ力なのだと思う。ダンスに出会って人生が変わったという声を聞くたび、その可能性に目を開かれる思いだ。

2017 年 9 月 15 日

未来へぽぽいっぽに

創造力が未来を作る

神前 沙織（NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）

これまでダンスの可能性についてたくさん語ってきたので、最終回は創造する力にフォーカスしたい。創造力や想像力は、人間の生きる源であり、火や水がないと生きていけないのと同じように必要不可欠だ。創造力はゼロを1にし、想像力は1を100にする。創造力が発明を生み、発明が人々の営みを豊かにしてきた。時には無駄なことも生むかもしれないが、そこから学ぶこともあれば、視点を変えれば貴重なものになる可能性もある。それを上手に使うか悪用するかも、使う人の想像力に左右される。そう考えていくと、創造する力は、何よりも柔軟に育てなければならない力だと思う。

近年、学校にアーティストを派遣する事業で校長から「子どもたちは自分でゼロから何かを創ったり表現したりする経験が乏しいので、創作ダンスは大変良い機会だ」と言っていただくことが増えた。ありがたいのだが、機会の乏しさが、もっと何とかならないだろうかと案じている。子どもにとっては家庭や学校が社会であり、大人になるためのすべてを吸収する大切な時間になる。科目にこだわらず、創造力を磨く授業を創って、担任教諭が自ら創造的だと思う授業をするのはどうだろうか。理科でも算数でも社会科でも、なんでもあてはまると思う。

また、社会全体で創造力を育む場として、地域の劇場や美術館、博物館、公民館や生涯学習センター等があると思う。施設の運営側が主体となって市民に提供する文化事業は専門性を活かすことができる。家庭が多忙化する中、公共サービスとして子どもの創造力を伸ばしてくれる場が増えたら、なんてすてきだろう。

子どもにも大人にも創造力は備わっている。引き出して磨いて活用する術を知れば、未来が開かれ社会も変化していくだろう。